

水辺の 生物



コオイムシ(子負い虫)

カメムシ亜目(水生半翅類)・コオイムシ科

写真提供 (財) 自然環境整備センター
上がオス、下がメス

コオイムシ科の昆虫は、世界で146種、日本では5種が知られている。

コオイムシは、体長17~20mmほどで、扁平な卵のような形をしている。体色は黄褐色や暗褐色で、前脚は鎌のような形の捕獲脚、後脚は遊泳脚になっている。水草などの植物が豊富な小川や池沼、水田、用水路などの浅い水域に生息し、水中の小昆虫や小魚などの水生生物を捕え、口針(こうしん)を刺して体液を吸う。えさが少ない場合は共食いすることもある。泳ぎが苦手で、ヨシ、ガマなどが繁茂する池沼や乾田ではひび割れた土壌の中などに潜んでいることが多い。

4~6月頃、メスはオスの背中に50~100個の卵を産みつける。オスが卵を背負っているように見えるため、「子負い虫」の名前がついた。メスは産卵が終わると泳ぎ去り、オスが水の浅い場所で卵の世話をしたり、外敵から守る。オスの背中に産みつけられた卵は1匹のメスのものとは限らないという。

卵は約1か月でふ化し、残された卵の殻は、そっくり脱落するので、オスは自由に飛ぶことができるようになる。幼虫は5回ほど脱皮をくり返して、7~8月ころ成虫になる。幼虫も成虫と同じく水生小動物などを前脚で捕えて体液を吸う。

本州・四国・九州に分布するが、水田・用水路の整備、水生植物の多い溜め池の減少などで、姿を消しつつあり、環境省の「レッドデータブック」では、準絶滅危惧種に選定されている。

取材協力 小西正泰氏

参考文献

『日本動物大百科』8昆虫I 日高敏隆(監修) 平凡社 1996年

『日本産水生昆虫』川合禎次・谷田一三共編 東海大学出版会 2005年

『改訂・日本の絶滅のおそれがある野生生物』レッドデータブック5昆虫類 環境省 2006年